

日本の「ふね遺産」制定に向けて

— 目的・意義と事例 —

正会員 平山次清*
正会員 新開明二***

正会員 内藤 林**

For the establishment of "Ship-Heritage of Japan"-Its purpose/significance and examples-

by Tsugukiyo Hirayama, Member Shigeru Naito, Member
Akiji Shinkai, Member

Key Words: *Heritage of Ships, Preservation, Succession*

1. はじめに

昨今、「世界遺産」など「遺産」を冠したモノや事象の認定の話聞くことが多い。我々をとりまく自然や人類が築き上げてきた文化・文明が「かけがいの無い」ものであり、保全・保存をすべきであるという意識の高まりによるものと考えられる。

この観点から「日本のふね技術・文化」がかけがいの無いものであり、保全・保存の意識が一般に満ちているかと言うと、現実には必ずしもそうっておらず、学術的に貴重な復元船が廃棄されるかもしれないという事実もある。

本講演では、ふね遺産の価値を一般に周知し、ふね遺産に対する誇り・憧憬を醸成するために、従来なされていなかった「ふね遺産認定制度」を日本船舶海洋工学会で立ち上げる試みの現状について紹介する。

2. 検討委員会立ち上げの目的・意義と経緯

我が国の造船関係も明治以来、我が国の近代化・高度成長を先頭に立って支えてきた実績があるが、貴重な遺産が失われそうな事態（復元船「浪華丸」など）も発生している。「ふね遺産認定」は、法的な根拠は無いが、学会として学術・文化的価値を公表することにより、そういった事態に掘り手から対処する一つの手段になり得るし、「ふね」にたいする誇り・憧憬を醸成する効果も期待できる。

そういった観点から、著者の一人は昨年2015年春のシニアセッション¹⁾にて「ふねの日制定」を提案し²⁾、内藤・新開氏らとともに、メールでの賛同を募った。その結果7月には188名の方から賛同メールをいただき、3名の連名にて、「ふねの日」制定を日本船舶海洋工学会理事会に、賛同者リストを添えて提案した。結果としては、諸般の事情により、当面は学術的に価値のある「ふね遺産」に特化することとし、検討委員会（委員長：茂里一紘）を立ち上げる事となった³⁾。3回にわたる委員会（表1に名簿を示す）での検討結果は「学会として実

施すべきである」と理事会に答申され、2016年3月の理事会にて、認定基準の設定・発掘・調査・評価を行う実行委員会の設置が決定された。

「ふね遺産」認定式は2017年（学会創設120周年に当たる）シップオブザイヤー表彰式と機を一にし、認定については、別途審査委員会が設置される予定である。

なお、従来日本船舶海洋工学会内で関連の活動が全く無かったわけではなく、関西支部で2007年に創設された「造船資料保存委員会」⁴⁾は造船設計特有の道具類を収集保存するほか「デジタル造船資料館」をWEB上に展開しており、「ふね遺産」活動の魁と言える。

また学会関係以外でも、写真集として「日本の海事遺産」なる刊行物も昨年作成されている⁵⁾ほか、保存船舶研究会による全国保存船一覧表⁶⁾では58隻がリストアップされている。更に海事技術史研究会でも弁財船⁷⁾など洋船含めて技術史的論考が発表されている。

Table 1 Member list (Mar.2016)

氏名	所属等	特記事項
茂里 一紘 (委員長)	海上技術安全 研究所 理事長	元広島工業大学長、 広島大学名誉教授
内藤 林 (幹事)	大阪大学 名誉教授	元学会長、シニア OS「造船技術・文化の保存」共同主宰、造船資料保存委員会（関西支部）委員長
平山 次清 (幹事)	横浜国立大学 名誉教授	シニア OS「造船技術、文化の保存」共同主宰
新開 明二 (幹事)	九州大学 名誉教授	シニア OS「造船技術、文化の保存」共同主宰
大和 裕幸	東京大学 教授	前学会長、 平賀譲アーカイブ主宰
小嶋 良一	関西設計 顧問（前社長）	浪華丸復元実施、 造船資料保存委員 会員
田中 義照	海上技術安全 研究所 研究統括主幹	東部支部 会務委員長
長谷川和彦	大阪大学 教授	復元船浪華丸の保存活動
安東 潤	九州大学 教授	西部支部 副支部長

* 横浜国立大学名誉教授

** 大阪大学名誉教授

***九州大学名誉教授

原稿受付 平成28年3月25日

春季講演会において講演 平成28年5月26,27日

©日本船舶海洋工学会

3. 他学会における制定例

この事業はどこが担うべきかと言うと、日本土木学会

6) や日本機械学会⁷⁾ が既に類似の趣旨による「遺産制定」を実施していることから了解されるように、「ふね遺産」関係は船舶工学・海洋工学に関係する学術考究団体である「日本船舶海洋工学会」が率先して担うべきであると考えられる。

土木学会は、土木遺産の顕彰を通じて歴史的土木構造物の保存に資することを目的として、2000年に認定制度を設立し、推薦および一般公募により、年間20件程度を選出している。国内が主であるが一部海外（台湾）の遺産もある。ふね関連では、熊本県/三角町三角西港、北海道/函館港改良施設群、福井県/三国町三国港エッセル堤、北海道/室蘭市チキウ岬灯台、沖縄県/糸満市大渡の用之助港、静岡県/静岡市清水区清水灯台、新潟県/佐渡市相川大間町大間港、といったように、港湾・灯台の認定がある。なお土木学会には「土木史研究委員会」が設置されている。

一方日本機械学会は創立110周年を迎えた記念事業の一環として2007年から「機械遺産」認定を開始し2015年末までに総計76件が、Collection、Site、Document、Landmark、といったジャンル分けで認定している。「ふね」に関係したものは、小菅修船場跡の曳揚げ装置（No.1）、青函連絡船及び可動橋（No.44）、旧横須賀製鉄所（造船所）スチームハンマー（No.58）、などもある。

認定に当たっての「指針」としては、「機械遺産とは機械技術の歴史を示す具体的な事物・資料であって、以下のいずれかに合致するものをいう。①機械技術の「発展史上」重要な成果を示すもの（工学的視点から）。②機械技術で「国民生活、文化、経済、社会、技術教育」に対して貢献したもの」

とし、「認定基準」として3項目、「認定対象」として4項目のほか「対象となる時代」としては「原則として産業革命以降の工業化がなされた時代を対象とするが、必要に応じて範囲を遡及的に拡大することを妨げない。また、年代の下限は設けない」を定めている。

海外学協会の例としてはRINAが歴史的な船に関する会議“Historic Ships Conference”を2年に1回開催しており本年（2016年）も12月にロンドンで開催される。

4. 「ふね遺産」の例

ふね遺産に認定されるかどうかは別として「ふね遺産制定実行委員会」は、まず貴重と思われる資料・モノを発掘・調査する必要がある。その後認定基準を基にした評価ということになる。

シップオブザイヤーも発足当初はジャンル別表彰はなかったように、「ふね遺産」も発足当初はジャンル別にならずシンプルなものでも良い。しかしながら、候補事例が増えるに従い、単なるモノだけでなく、そのモノを作製した技術者が獲得した知見が更なる大きな技術の発展につながったというような、「事跡」も顕彰すべきジャンルとして作るべきだといった議論がなされる可能性がある。ここでは、世間にはあまり知られていないが、単純に「モノ遺産」として価値があると思われる例をいくつかを、本文末尾の表2に掲げる。

写真1は、表2の復元船「浪華丸」の海上試験時の写真である。残っていた板図をもとに技術的考証をもとに復元された弁財船であり、海上試験の結果、従来言われていたより風上への切り上がり性能が良いことが示され、

定説を塗り替えたという意味でも工学的に貴重な「ふね」である。大阪の「なにわの海の時空館」で展示されていたが、同館の閉鎖に伴いスクラップとなる可能性もあり、早急な保存対策が望まれる。



Photo. 1 Restored ship “Naniwa-maru” sailing at Osaka Bay for academic examination on her performances in wind.

5. おわりに

「ふね遺産認定制度」を立ち上げる試みの現状について紹介した。今後学会員の皆様にも貴重なふね遺産の発掘・調査といった面で協力をお願いしたい。

なお、技術史的研究や解説が当学会の論文集や学会誌に掲載される例が無いわけでは無いが、論文審査部門には「経済や文化への影響を含めた技術史」といった領域は設定されていない。

従って、将来的には「日本船舶海洋工学会」の定款あるいは論文審査部門にも「ふね技術・文化の評価・保存」といった内容が含まれるように改訂がなされる事が望まれるが、この点については、昨年より毎年春学会で開催することとした「シニアセッション」も定款改訂を後押しするものと考えられる。

謝辞

本稿では理事会やふね遺産検討委員会等でのご意見・資料を参考にさせていただいた。原会長・白木原理事ほか茂里委員長・長谷川委員・小嶋委員をはじめ委員各位に御礼申しあげます。また賛同メールをいただいた188名の方々にも改めて御礼申しあげます。

参考文献

1) 内藤林、平山次清、新開明二：平成27年春季講演会報告「OS3：造船技術、文化の保存」、日本船舶海洋工学会誌、61号、P66、2015年7月

2) 平山次清：造船技術の保存—歴史的造船所・復元船の現状と「ふねの日」の提案—日本船舶海洋工学会春季講演会論文集（CD）、2015

3) ふね遺産制定検討委員会：「ふね遺産制定検討委員会」発足報告と協力依頼、日本船舶海洋工学会誌、KANRIN 64号、2016年1月

4) 造船資料保存委員会（日本船舶海洋工学会関西支部）<http://www.jasnaoe.or.jp/zousen-siryoukan/>

index-top02.html

5) 海事遺産写真集選定委員会編集：写真集日本の海事遺産、海の日特別行事実行委員会、2015年7月10日

6) 桃井賢一、中川洋、門田充弘：全国保存船舶一覧表、保存船研究会 2008年4月

7) 小嶋良一：樽廻船の構造上の特徴について、海事技術史研究会誌、第11号 pp48-52)、2010年

6) 土木学会土木遺産

<http://www.jsce.or.jp/contents/isan/>

7) 日本機械学会機械遺産

<http://www.jsme.or.jp/kikaiisan/>

8) RINA“Historic Ships

Conference”http://www.rina.org.uk/Historic_Ships_2016.html

Table 2 Example of the candidates of FUNE-Heritage of Japan

対象	内容	学術的価値	保存場所	備考
復元船「浪華丸」 	江戸時代の弁財船(俗称千石船)の全長29.9mの復元船	復元船による構造・強度・建造方法、海上試験により、弁財船の耐航・縦性能が現代工学的視点から明らかとなった	「なにわの海の時空館」(大阪市)に展示されていたが同館は閉鎖された	展示館閉鎖に伴い「浪華丸」が解体され散逸する可能性がある。
造船設計に使用する機器	造船用製図・求積機械等	造船技術史・教育上から価値がある	神戸大学海事博物館ほか造船関連分野を有する各大学	主として造船資料保存委員会(関西支部)の活動による
平賀讓博士アーカイブ	遺稿・技術ノートなど	造船技術史・教育上から価値がある	東京大学	
波なし船型水槽試験用模型 		造船技術史・教育上から価値がある	神戸大学海事博物館	
航海性能計測コンテナ 	1971年の実船実験に使用した、内部にセンサ・記録装置を満載したコンテナ	我が国の耐航性能研究上の一大プロジェクト(SR125)を象徴するものである	横浜国立大学(屋外保存)横浜国立大学ミュージアムにもパネル展示あり	ミュージアムは公開
収集(?)小型漁船 		多数の漁船(ゴンドラやバイキングシップも)の収集保存として価値がある	みちのく北方漁船博物館(青森、閉鎖された)	多くの収集物が散逸する可能性がある
蒸気船「凌風丸」模型 	1855年(安政三年)頃作成	我が国初の実用蒸気船「凌風丸」の建造に備え作製された蒸気機関を備えた模型船として技術史の観点から価値がある	公益財団法人鍋島報効会(佐賀県)	
君沢型洋式帆船造船記念碑 	安政2年竣工・(全長24,6m)	我が国初のロシア流帆船建造に協力した船大工からは後の近代造船建造に携わった者もあり、造船技術の伝習・発展の観点から重要である	戸田村(伊豆)	